

講話

2018 年度に社会学部は開設 60 周年を迎えました。2018 年 3 月までに卒業生約 27000 名弱（26,945 名）を送り出し、日本における社会学部の草分け的な存在として歴史と伝統を築いてきました。

1958 年 4 月、社会学科が文学部から独立する形で社会学部社会学科が開設されて以来、本学部は時代の変化とともに改革・再編の歴史をたどってきました。簡単に振り返ってみますと、1964 年に産業関係学科、1967 年に観光学科が設置され、その後約 30 年間、特色のある 3 学科がそれぞれ充実・発展し、1998 年には観光学科が観光学部、2006 年には産業関係学科が経済学部経営学科とともに経営学部、それぞれ改組・拡充され独自の歩みを始めました。一方、大学院社会学研究科は 1960 年に文学研究科から応用社会学専攻が独立する形で設置され、2006 年に募集停止になりましたが、それに先立ち 1990 年に社会学専攻を設置されました。その後、社会学部は 2002 年に現代文化学科、2006 年にはメディア社会学科を設置して、現在の 3 学科体制に移行し、すでに 10 年以上が経過しています。

この間、2012 年には、社会学を基盤とする学部としての特色を明確にするために、学部共通科目の設置を含むカリキュラム改革を実施しましたが、これは結果的に 2016 年の全学的なカリキュラム改革を先取りするものでした。また、2016 年からは 3 学科を横断する「国際社会コース」を設置しました。これもまた大学の国際化という社会的要請、とりわけ本学におけるグローバル化の取り組みと軌を一にする先駆的な試みでした。

さて、60 周年の節目に当たり、改めて社会学部のミッションについて考えてみたいと思います。今年度、社会学部では、社会学部における教育目的を見直し「建学の精神”PRO DEO ET PATRIA”（普遍的なる真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために尽くす）にもとづき、社会学及び関連領域の学修をつうじて、社会の問題を発見し、分析し、提言できる人間を育てる」といたしました。後段の「発見」「分析」「提言」は従来から学部の教育目的として掲げてきたカリキュラムポリシーやディプロマポリシーの根幹をなすものです。今回の見直しは、これを直接、建学の精神と結びつけたところにあります。「普遍的なる真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために尽くす」と「社会の問題を発見し、分析し、提言できる人間を育てる」こととがまったく違和感なく、結びついていることにお気づきでしょう。この結びつきには、深い歴史的な背景があります。

「社会学」という言葉を初めて使ったのは、フランスの実証哲学者であるオーギュスト・コントであり、このことから一般に、社会学の起源は、フランスの実証哲学に求められています。たしかにこれは事実なのですが、それは今日の社会学に直接つながるものではありません。社会問題の解決のために、フィールドワークや調査にもとづき、データを分析して、提言するという今日の社会学の研究スタイルは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのシカゴで生まれてきたものです。

シカゴ大学は 1892 年、大富豪ロックフェラーの基金をもとに創設されました。このとき、世界で初めて社会学の博士学位を出す社会学科（department of sociology）が開設されまし

た。シカゴ大学創設時の逸話は、シカゴ大学と社会学科が宗教的なミッションと密接に結びついていたことを示しています。ロックフェラーは石油王として知られる大富豪でしたが、バプティストの信者でもありました。産業革命の波に乗って財をなしたロックフェラーは、フィランソロピーの一環として、大学の創立を思い立ち、イエール大学の聖書学者でバプティストのウィリアム・レイニー・ハーパーに相談を持ちかけます。ハーパーは、ロックフェラーの申し出に賛同して、自分が中心になってシカゴ大学の設立に手腕を発揮することになります。当時のアメリカでは、産業の発達によって大都市が成長し、ヨーロッパから多くの移民が集まっていました。とくにシカゴは、1840年に人口4000人のミシガン湖畔の港町であったものが、1890年には100万人を超える大都市に成長しており、20世紀初頭には200万人を超える勢いでした。シカゴをはじめとする大都市では、民族問題や貧困問題が集積し、リベラルプロテスタントの改革運動が生まれていました。貧困調査やセツルメント活動は、そうした改革運動の一環として取り組まれていたのです。シカゴには、ジェーン・アダムズが率いるセツルメントハウスであるハルハウスが活動を始めていました。ジェーン・アダムズは後にノーベル平和賞を受賞することになります。

さて、ロックフェラーから相談を受けたウィリアム・レイニー・ハーパーは、シカゴに世界水準の大学院大学を作ろうとして、革新的な大学制度を設計しました。そもそも研究センターの大学院大学という考え方がまだアメリカには定着していませんでした。シカゴはその最初の成功例となります。また、大学出版会や公開講座などもハーパーの発案です。公開講座では、社会改革についての議論が盛んに行われました。しかし、世界初の社会学科の設置は、ハーパーから打診を受けた初代学科長アルビオン・スモールの発案によるものでした。

アルビオン・スモールは、バプティストの牧師の資格を持ち、コルビー大学という大学の学長を務めていました。彼は、ドイツに留学して社会学に関心をもち、コルビー大学では学長の講義を、従来の道德哲学から社会学に替えていました。ハーパーからシカゴに来ないかという打診を受けて、スモールは、社会学を教えられるのであれば、行きたいと答えたのでした。ハーパーは、それでは社会学科を作りましょうということになり、スモールを学科長にします。同時に、これまたバプティストの牧師であり社会事業の専門家であるチャールズ・ヘンダーソンを社会学科のファカルティに加えます。ヘンダーソンは、シカゴ大学のチャプレンも兼務しました。初期のシカゴ社会学は、ハルハウスとも連携をとって、社会改革のための科学として社会学を発展させようとしていました。社会学そのものがリベラルプロテスタントの社会改革運動の一翼を担うものとして位置づけられていたのです。

社会学の研究者ならだれもが知っている *American Journal of Sociology* も1895年、つまり学科開設3年目に創刊されています。この創刊は、ハーパーの発案でした。「公開講座の世界」というシカゴ大学出版会から出版されていた雑誌が廃刊することになり、その後継として社会学の雑誌を出すことになりました。あるとき、学科長のスモールはハーパー

総長から呼び出され、社会学の雑誌の創刊を検討して欲しいと頼まれます。スモールは学科に持ち帰って、同僚のヘンダーソンと相談します。これは大変なことになったと思いつつ、しかしこれはわれわれの「ミッション」だと一大決心をするのです。「ミッション」という言葉はここでは比喩以上の意味をもっていたと思われます。

アルビオン・スモールの授業は、とにかく退屈であることで有名でした。かれは社会学の範囲といった問題を扱っていました。しかし、今から考えると、彼は AJS の編集を一手に引き受けており、なにが学術雑誌に掲載するのにふさわしい論文かを考えていたのだと思います。社会学の定義がまだ定まらず、社会改革の提案と渾然一体となっていた時代に、スモールは、科学としての社会学の要件を研究していたのだと思います。スモールはまた、学生たちには、自分の理論を押しつけるようなことはせず、むしろ社会事業の専門家で現場に詳しいヘンダーソン先生に付いて、地元のシカゴの社会問題を研究するようにと学生たちに勧めていました。やがて、大著「ポーランド農民」で知られるウィリアム・トマスが大学院から育ち、シカゴ大学のスタッフに加わります。「ポーランド農民」はシカゴモノグラフの先駆けをなす研究ですが、この研究がハルハウスの相続人であるヘレン・カルヴァーの多額の寄付によって可能になったことを忘れてはなりません。トマスは、ロバート・パークをシカゴに招聘した点でも、シカゴ社会学に貢献しています。シカゴはパークの指導の下で、1920 年代にシカゴの黄金時代を迎えます。スモールは 1926 年まで実に 34 年間、社会学科長を務め、シカゴ大学社会学科をアメリカ社会学の拠点に育て上げたのです。この間に、社会学は、リベラルプロテスタントの社会改革運動と区別のつかない状態から、次第に、社会問題を発見し、分析し、提言する学問として自立していきました。

1930 年代まで、シカゴ社会学はアメリカ社会学と同義でした。しかし、1950 年代までには、タルコット・パーソンズの構造機能主義やポール・ラザースフェルドの計量研究が台頭し、一時期、シカゴ社会学は、時代遅れと見なされるようになりました。それが「シカゴ学派」として再評価されるのは 1960 年代後半になってからです。

さて日本で社会学が本格的に導入されるようになったのは、第二次世界大戦以降のことです。社会学や社会科学は、社会主義を連想させることから戦前・戦中は忌避されておりました。敗戦によってそれまでの価値観が転倒したとき、マルクス主義とアメリカの社会学が、新しい学問として注目されるようになりました。マルクス主義は、日本では戦前からの伝統がありますが、社会学、とくにアメリカ社会学はほとんど全く、新しい学問、民主主義、市民主義の学問として受け止められました。1950 年代に、本学をはじめ、いくつかの有力大学（一橋 51 年、法政 52 年、東洋 59 年、関学 60 年）が社会学部を開設したのは、このような時代的な背景によるものと考えられます。

冒頭に述べましたように、本学部は開設以来、時代の変化とともに改革・再編を繰り返してきました。今後も、少子高齢化・情報通信技術革命・グローバル化の趨勢を受けて、社会の変化に敏感な社会学部ならではの取組を進め、国際通用性のある社会学の教育・研究を発展させ、日本と海外の社会と文化を深く理解し、21 世紀を生き抜く資質と能力を備

えた人材を社会に輩出していくこと、これが本学部に課せられた使命であると考えております。と同時に、この機会に、社会学が、その原点において、「建学の精神」と関わりの深いミッションに結びついていたことも記憶にとどめておきたいと思い、お話しさせていただきました。ありがとうございました。